
心のトビラ

みやお

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心のトビラ

【Nコード】

N3496R

【作者名】

みやお

【あらすじ】

前の学校ではケンカばかりして、周りに恐れられていた羅夢。

羅夢のホントの心は…？

前書き（前書き）

ちよつと、残酷かも…

前書き

「フッフ…ハハハ…アハハハハ」

「ねえ、どうしたの？フッフ」

「早く、立ちなよ…ねえ」

「フッフ…ばいばい」

「アハハハハ」

だんだん少女の声が遠くなっていく

彼女の名前は赤阪羅夢。
あかさからむ

学校一の変人。そしてケンカ、いや暴力好きな16歳だ。

彼女にスポーツをやらせれば、必ずトップに立つ。

何故、彼女がこんなにも運動神経に優れているのかは分からない。

そして、彼女にはかなりの力もある。

そんな彼女に一発でも殴られた奴は必ずしも病院行きになる。という噂までたっている

だから、彼女に歯向かう奴はいない。

だが、ここでは違う。

誰かが齒向かうわけでもない。

彼女が、自分の暴力を封印したのだ。

彼女は転校した。

そこで、彼女は一切周りに暴力を振るわないつもりだった。

ある男が来るまでは。

普通の女の子（前書き）

クゥクラスメイト

羅〓羅夢

先〓先生（担任）

普通の女の子

ク「よろしくね！赤坂さん。」

羅「うっうん」

ク「赤坂さんの、前の学校ってどんな学校だったの？」

羅「普通だったよ。」

（^{ケンカ}事実だけは、知られたくない。）

羅夢は意外と早く、クラスに馴染めた

そして、友達もいっぱい出来た

羅夢の致命傷とも言える、暴力は振るわずに。

だが、たまに骨がウズウズしてたまらない時もあった

そこをなんとかガマンして、約1年が過ぎた。

大分、骨がウズウズする事も減ってきた。

そう。あの男が来るまでは

先「転校生を紹介するぞーーー」

スラっとした、顔立ちの整っている男の子が入ってきた

羅夢は驚きを隠せない

「???」大村瑞生おおむらみずきです。 よろしくお願ひします。」

たちまち瑞生は人気者になった。

それに対して、羅夢はどんどん物静かになっていった。

タイムン…！？

ク「そういえば、大村君が転校してからだよねえ」

羅「えっ、何が？」

ク「うちの学校の喧嘩上等のヤツらがボコボコにやられていくの…」

(…!!)

ガタンっ

ク「羅夢、どーしたの？」

羅「ゴメン！あたし気分悪いから、早退する…」

ク「大丈夫なの？」

羅「うん、ありがとね。瑠海^{るみ}ちゃん」

???「待てよ!!」

羅夢は気にせずクラスを出ようとする羅夢

???「待てつつつてんだろーが!! 赤阪羅夢。」

声がした方を見ると、この前転校してきた瑞生が立っていた。

瑞「赤阪羅夢。中学ん時の蹴りつけようじゃねえか。」

羅「中学の時の蹴り？」

瑞「とぼけんじゃねー！！明日の放課後、タイマンだ」

クラスがざわめく

羅「しょうがないわね…売られたケンカは買う主義だから…」

- 次の日

タイム
勝負は校庭であつた。

瑞「行くぞ!!」

瑞生の後ろに大量の男たちが付く。

羅「ちょっと!!タイムンでしょ!!」

(心底卑怯なヤツ…)

瑞「行け!!」

瑠「もし、羅夢が強いとしても、あんな大人数の相手…!!?」

さっきまで威勢がよかった男たちは1人残らず気絶していた

瑠「そんな…」

瑞「ほお…1年間、何もしてなかった割には、全然衰えてねえじゃねえか」

羅「うつせーんだよ！カンケーないヤツらまで巻き込みよって…」

ド
カ
ッ

ボコッ

瑞「お前：１年間で性格も変わっちまったんだな…」

羅「どこが!？」

瑞「前はケンカ中、ずっと笑ってて気持ち…」

ドカッ

羅「さっきからゴチャゴチャうつせんだよー!!」

ボカツ

羅夢は無傷だが、瑞生はボコボコだ

突然羅夢が手を止めた。そして

「この勝負はあんたの勝ちだ。
タイムマン」

と言って帰っていった。

お父さん

ガチャ

羅「ただいまー」

???「こっちに来なさい」

(またか…)

羅「なあに？お父さん」

父「今日、久しぶりにやった勝負^{ケンカ}で負けたそうじゃないか」

(どこから嗅ぎ付けてくんのよ…)

羅「ゴメンなさい。」

父「なんでもトップを取れと言ってるじゃないか!!」

バシッ

羅「っ！」

父「次、1位取れなかったらタダじゃすまないからな」

羅「はい…」

羅夢は自分の部屋へ戻っていった

羅「はあ…どーしたらあんなに早く嗅ぎ付けてこれんのかな…つつ
ーか、思いつきし叩いて…」

叩かれた頬を触る

羅「痛っ！」

鏡でみると腫れている

(…でも、あれでよかったんだ。)

R e a s o n (前書き)

これは、瑞生たちの勝負が終わった次の日の話です

R e a s o n

瑞「どーゆーつもりだ！？まだ勝負は終わっちゃあいねーよー！..^{タイム}」

羅「だ・か・ら！！大村君の勝ちって言うてるじゃないですか…」

羅夢はいつもの冷静さを取り戻している。

羅「私は負けたんです。ケンカは二度としないと誓ったのに、熱くなりすぎてケンカをしてしまったから…だから、気持ちを抑え切れなかった私の負けなんです。」

瑞生は返す言葉がなかった

まだ、クラスメイトはよく分かっている。

成績優秀で、テストでは満点しか取ったことがなかった羅夢が、実はハンパなく強すぎた元ヤンだった事に。

瑞生は自分の席に戻っていった。

それに続いて何人かの女子が付いていく。

（やっぱり、イケメンは喧嘩上等のヤツでも人が集まってくるんだ〜）

と羅夢は思う。

ク「ねえねえ、瑞生君。」

瑞「あん？」

ク「中学時代の羅夢って、どんな感じだったの？」

瑞「オレはクラスが違ったからよく分かんねーけど…友達がゆーには、授業中寝てたり、余所見とか、サボってばかりしてノート取ってないクセに、テストじゃいつも満点で先行たちが驚いてたらしーぜ。」

ク「へえ…」

（成績の点では変わってないんだ…）

瑞「だし、誰もアイツに逆らうヤツはいなかったぜ。アイツのパンチ力約200kgとかだぜ） ……」

教室中が静まり返る

羅「ちょっとオ！！何へんな事言ってるんですか！？私、そんなにパンチ力、強くありませんから。」

いつの間にか、羅夢と瑞生は和解しているようだ。

「???へえ…あのコ、意外と出来そうね」

私のせい

ガラッ

いかにも怖そうな女子2人組みがやって来た

「????「赤阪羅夢!!」」

ガシヤ

羅夢の机を蹴り飛ばす

「????「ケンカ、やるーぜ!!」」

羅「イヤです。」

???「あぁん？年上に向かって何言ってるんだよ！？」

羅「いくら先輩だろうと、ケンカはしません！」

ボコッ

???「調子こいてんじゃねーよ！」

瑠「羅夢!」

羅「いいの。これは私の問題。」

???「負けるのが怖くて何も出来ないとか...!」

???「うわゝダッセー」

瑞「やめろ!」
「コイツはそんなに弱くねえ!」

瑞「コイツは二度とケンカしないって決めてるんだ。そんなにケンカがしたいなら、オレが相手になってやる」

羅「やめて!!これはあなたが関わることじゃない!!」

瑞「ゴチャゴチャうつせーよ!黙っとけ」

????「威勢の良さだけは認めてやる。負けても後悔すんな!!」

「???? 来い!!」

そう言って、瑞生は連れて行かれた

羅「私のせいで…私のせいで…」

狂う歯車

次の日案の定、瑞生はボコボコになって登校した

羅「ゴメン！！私のせいで…瑞生は関係ないのに…」

瑞「もう、いーから謝るなって！」

そうやって、どーこー言い合っているうちに、昨日の二人組みがまたやって来た

????「赤阪羅夢さんよお」

「????」コイツじゃ弱くて相手になんねーんだけど……」

瑞「オイ!!弱いつてなんだ!?!弱いつて!」

「????」雑魚は黙つとけ!」

(これ以上周りに迷惑はかけたくない……)

羅「わーったよ。行きゃあいーんだろ?」

瑞「お前！！何考えてるんだよ」

「？？？」やる気になったか…来い！」

羅夢はある倉庫に連れて行かれた

「???」
そーちよー
「総長!!」

総「今日こそは、連れて来たか？」

総「昨日はあんな男連れてきやがって…」

総「やれ!!」

羅夢に向かって大勢のヤンキー（女）たちが向かってきた。

（こんな大勢相手じゃ…瑞生も）

瑞生の大量の手下共と戦ったとき同様に10秒程度で20人近くのヤンキーたちを気絶させた

総「あんだ、やるなー。ウチに入らねーか？」

羅「イヤです！」

羅「あんたの手下、みんな気絶してる。フッフ、ハハハ」

羅「残るはあんただけ〜アハハ」

総「気持ちわりいまねしやがって！！死ねーーーー」

羅「よっ
」

ボコッ

素早く交わし、総長の顔面にパンチ一発。

総「うつ
」

もの凄い形相で走ってくる総長にカウンターキックを一発。

羅「どーしたのー？もー終わりなの？」

羅「ばいばい」

フフフ

アハハハハ

羅夢は不気味な笑いを残して立ち去った

瑞「昨日、オレが連れて行かれた所は倉庫だった。」

瑞「そこには大量の女共がいて、オレはそいつらにボコボコにされ
たんだ。」

ク「じゃあ、羅夢は…」

瑞「いや、そんなことはない。」

瑠「どうして呑気にそんな事が言えるの!？」

瑞「オレと羅夢が戦ったとき、羅夢は本気で勝負してなかったんだよ...」

ク「えっ!？」

瑞「一発でも本気で殴られたら、”病院行き”って言われてんだよ...」

ク「病院行き…」

瑞「だが、オレは病院に行かなかった。」

クラスメイトたちも理解したようだ。

狂う歯車（後書き）

羅夢ちゃん…狂いました

”ケンカ”の時だけ…ですよ？

心のトビラ

ガチャ

父「お帰…って羅夢！！お前またケンカをしたのか！？」

羅夢がケンカで狂っている事を瞬時に判断する。

さすが父親なのだろう

羅夢は無視して部屋へ行く。

トントン

父「はいるぞー」

ガチャ

羅夢はベットの上で足をぶらつかせている

父「ケンカはやめろと言ったじゃないか!!」

羅「ホラ。やっぱり。」

父「はあ?」

羅「この前、あたしがケンカをやった時、
”1位”をとれっって言
ったよね？」

羅「じゃあ、どうして今はやめろって言っの？お父さん、
いい加減にしてよ！..」

父「なっ」

羅「ケンカを教えたのもお父さん。」

羅「ケンカをやめろって言ったのもお父さん。言ってる事が矛盾してるよ!!だし、あたしはもう、ケンカしたくないの!!無意味に人を傷つけるだけで、虚しいだけじゃない!!」

羅夢は深呼吸してから

羅「とにかく、ケンカの事でお父さんは口出ししないで!!」

と言って扉を閉めてしまった。

まるで自分の心のトビラを閉ざすように…

（なんか、言いたいコト言ったらスッキリした。）

心のトビラ（後書き）

次、最終回です

羅夢の心はスッキリしても、ラストの後味がスッキリしないかも…

母の願い

羅「お父さん、まだそこにいるんでしょう？」

父「…」

羅夢は扉を背もたれにして座った

羅「あのね、私にとって勉強のトップはもう慣れたから気にしない。でも、ケンカは誰も喜ばない。」

羅夢は一息いれてから

羅「死んだお母さん、あたしがケンカでトップをとって、喜ぶと思

うっ。
「？」

父「……！」

羅「お母さんね、小さい頃のあたしによく、こつ言ってたの。」

「パパはケンカがとっても強いの。でも、それはホントのパパじゃないの。」

「ホントのパパはね、とっても優しいの、ケンカと同じように。」

「ママ、1回パパに助けて貰ったコトがあるの。」

「男の人たちに囲まれて、お金を取られそうになったの。そこにお父さんがやって来て、助けてくれた。それからママとパパは付き合っ
つて、結婚した。」

羅「お母さんはね。お父さんにホントの自分、優しいお父さんに戻
って欲しいの!!」

羅「お母さんの想い、踏みにじらないようにケンカはしない。でも、助けを求めてる人がいたら、ケンカをしてでも助ける。」

羅「あたしのこの強さは、人を助ける為に使う。だから、さっきも言ったけど、ケンカの事に関しては口出ししないでね。」

父「わっ…分かった」

羅「ヤダっあ！！お父さん、泣いてんの！？」

父「そうゆうお前こそ泣いてんじゃないか。」

羅「泣いてない！！」

二人は泣いて、笑った。

初めて打ち解けあえた。

母の願い（後書き）

なんか、へんなまつまり方…

とりあえず、ありがとうございました

み
や
お

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3496r/>

心のトビラ

2011年10月8日19時12分発行